

目次

源氏積 (時雨亭文庫本)	5
源氏積 (九曜文庫本)	81
奥入 (大橋家本)	89
光源氏物語抄 (黒川文庫本)	145

などはなくてそとはかゝればにやといふは  
ある時はありのすさみにゝくかりきなくて  
そ人は恋しかりける

御かと野わきしてものこゝろほそきたくれ  
ゆけいの命婦をみやすところのはゝのもとへつ  
かはしてはかなき御あそひにもことにふれ  
てはへくしく人にはまさりし御けはひかた□□  
のおもかけにたゝせ給やみのうつゝにはなを□□  
をとりけりとあるところ

むはたまのやみのうつゝはさやかなる  
ゆめにいくらもまさらさりけり

命婦かしこにいきてかどひきいるゝ程にくさ  
もしけく○あれたるを月のかけはかりそや  
えむくらにもさはらすさし入たるとあるは

やえむくらしけるやとのさひしさに  
人こそみえねあきはきにけり

露ふきむすふとよみてつかはしたるに更  
衣の母えみはて給はていのちなかさのいと  
つらくおもひ給へらるゝにまつと思はんにごさ

へはつかしくとあるは

いかにしてありとしられたかかさこのまつ  
の思はんこともはつかし

御息所のはゝ命婦にあひてこゝろのやみに  
なといふは

人のをやのこゝろはやみにあらねども  
こそおもふみちにまとひぬるかな

御息所のはゝ命婦のをくり物にかの御かたみ  
のさうそくひとくたりをし給つるをやかてう□□  
に御らんせさするになき人たつねみえたるしる  
しのかんさしならばとてたまの行氣おと

よまれたると又あさゆふのことくさにはね  
をならへえたたをかはさんと契しらせ給とあ  
るは

件の玄宗なけきかなしみ給に方士といふ  
人きたりて貴妃のおはし所をたつねん  
といひて雲にのほり地にいりてみれどもあ  
はずはかへらざるに蓬萊にゆきてあひ  
たてまつりぬ 玄宗にこのよし申さん

さらにしんせられししるしを給はらんと

いふにたまのかんさしをとりてこれを

まいらせたらはしんせられなんといふにかん

さはよにある物なり しるしとするに

たらず 人にしらせすしてともにの給へる

ことやあるといふに貴妃むかし七月七日長生  
殿にして天にあらはねかはくははねをなら

ふるとりとならん 地にあらはねかはくは枝  
をつらぬる木とならんと契給へりきといふ

これを方士かへりまいりていかてすむらんあ  
さちふのやとゝよみて

このころ亭子のみかとの御てつからかき給て  
伊勢と貫之とに山とこととはつけさせ給へる  
長恨哥の御系御らんしつゝともし火を

かきあげつくしておはしますといふは

夕殿 螢 飛 思 悄 然 秋 燈 挑 盡 未 能 眠

といふ長恨哥の文也 これは恋のこゝろ也 こ  
の系つかさのとのみ申のこ系きこゆるは

うしになるへし 人めをおほしてよるの

をとゝにいらせ給ても露まどろまれたまふ

ことなし あしたにおきさせ給てあくるも  
しらすとあるは

たますたれあくるもしらすねしものを  
ゆめにみえずとなけきつるかな

源氏のわらはにてこまのくにの人にみえ給所  
に宇多院の御いさめありけりといふは寛平  
の遺誠にみかとは異國の人にはみえ給まし  
とあるところとなり

二 はゝき木  
さるはいといたふよをまめたち給ける程  
かたのゝ少将とわらははれ給けんかしといふは  
たつぬへし

あまひのう系の御もとなり  
おほいどのにたえくまかりいて給 しのふの  
みたれやとうたかいきこゆるところ  
むさしのゝわかむらさきのすりころも  
しのふのみたれかきりしられす  
あまよのしなさためるところにせはきい

「二ウ  
「三ウ